



ムハンマド・ビン・アブドゥルワッハーブのタク フィール観とジハード観

中村, 覚

(Citation)

国際文化学研究 : 神戸大学大学院国際文化学研究科紀要, 59:35-70

(Issue Date)

2023-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100480924>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100480924>



ムハンマド・ビン・アブドゥルワッハーブ のタクフィール観とジハード観

中 村 覚

1. 序論：ワッハーブ主義に関する固定観念の問題

本稿では、ワッハーブ主義の宗教政治観を考察する。ワッハーブ主義は、従来、ワッハーブ主義の始祖であるムハンマド・ビン・アブドゥルワッハーブ (Muḥammad bin ‘Abd al-Wahhāb: 以下、本稿ではサウディディアラビアでの略称である〈シャイフ〉(al-Shaykh) と記す) によって提唱されたイスラームの刷新 (tajaddud) に始まり、現在のサウディアラビアまで、一貫して過激な思想としての特徴を持つと考えられてきた。その特徴は、三点に要約できる。一つ目に、アッラー以外の神格、人間、墓、石、木などへの信仰を多神教崇拜 (shirk) として徹底して排するタウヒード (tawhīd; アッラーの一神性) 観である。二つ目に、厳格なタウヒードの教えに従わないムスリムを不信仰 (kufr) として裁定するタクフィール (takfīr) 観である。三つ目に、タクフィールの結果として不信仰と認定されたムスリムに対する「戦いのジハード (jihād; 単にジハードと略する)」観である。このようなワッハーブ主義の特徴は、13～14世紀にシリア方面 (al-Shām) で活躍したイブン・タイミーヤ (Taqī al-Dīn ibn Taymīya)¹ の過激な思想を継承したと考えられてきた。また、ワッハーブ主義は、カアバ神殿占拠事件のような反乱や、アル＝カーイダのようなテロリズムの源泉となる宗派ともみなされてきた。

これに対して、先行研究には、「ワッハーブ主義は過激である」と見る固定観念を打破する新しい研究が現れ始めている (Nakamura 2019, 311-2)。だが、本稿は、ワッハーブ主義に関する固定観念を再生産してきた研究と、それを打破しようとしてきた研究のどちらも、実は〈シャイフ〉の著した著作の充分な解説に基づいてこなかったという問題点を確認することとなる。

この問題点は、二つの方法論上の課題に言い換えることができる。一つ目は、

先行研究が〈シャイフ〉の著作を引用してこなかった史料上の課題である。二つ目に、では、先行研究はこれまでどのようにしてワッハーブ主義について論じてきたのかという謎が浮上する。「ワッハーブ主義は過激である」と見る固定観念を再生産してきた先行研究は、〈シャイフ〉以外のワッハーブ主義のウラマーの著作を引用してきた。また、ワッハーブ主義の教義に関して、アラビア半島以外におけるムスリム世界を抽象化して発展してきたイスラーム学の問題や歴史研究等の二次資料を使って解釈してきた。特に、「ワッハーブ主義は、イブン・タイミーヤの教義の模倣である」という説明は、〈シャイフ〉の著作を引用しなくても、ワッハーブ主義に関して説明した印象を再生産してきたという問題がある。他方、ワッハーブ主義に関する固定観念を打破しようとしてきた先行研究の多くは、新しいイスラーム学研究の理論枠組みを機械的に適用しているのである。

そこで本稿は、二つの課題を同時に克服する研究方法として〈シャイフ〉の著した著作の解説を進める際に、〈シャイフ〉の宗教政治観を構成するイスラーム教の諸概念について、彼の書簡や宗教的布告などの原典資料に基づいて解説する。そして、〈シャイフ〉のタクフィール観とジハード観について、中道的イスラームと比較して評価する。本稿の結論を先取りすると、〈シャイフ〉の主意主義的な世界観には、自分たちを過激だと考えるような認識はないと明らかになった。

2. ワッハーブ主義に関する欧米での代表的な先行研究における引用の問題

本稿では、ワッハーブ主義に関して欧米世界で出版されてきた先行研究と、アラブ世界で出版されてきた研究に大別する。本節では、ワッハーブ主義に関する先行研究による立証の問題について、欧米世界で著されてきた代表的な研究として、Al-Yassini (1985)、Helms (1981)、Laoust (1939) について検討する。実のところ、それらの三つの研究は、共通する方法論上の問題点を継承してきた。

2.1 Al-Yassini (1985) による研究：原典の誤読

まずは、1980年代に、サウディアラビアの政治と宗教に関する代表的な研究

の一つとなっていた Al-Yassini (1985) について検討する。同著は、アラビア語にも翻訳されている (al-Yāsīnī 1987)。

Al-Yassini (1985) は、ワッハーブ主義について、タウヒードの教えを広めてきたが、それにおける過激性を指摘している。その根幹となる説明の一節は、「信仰告白するムスリムが、無信仰者と非難され、殺害されるべきである」という過激なタクフィール観をワッハーブ主義の見解として説明している箇所である (Al-Yassini 1985, 28)。それを説明するために Al-Yassini は、〈シャイフ〉が、ワシュム地域 (al-Washm) のムラート (Murāt) の宗教風紀委員 (muṭawwīw) であるアフマド・イブラーヒームに送った書簡を引用した。Al-Yassini によると、〈シャイフ〉はその書簡に「不信仰者を攻撃し、財産を没収すべきである」と書いていたという (Al-Yassini 1985, 141, fn.34)。

本研究では、Al-Yassini が引用したという 1930 年の出版物を入手することができなかったため、それと同じ書簡について、別の書籍であるがビン・ガンナームの著作 bin Ghannām (1985) で確認した。〈シャイフ〉の著した書簡は、出版年の異なる複数の書籍に所収されてきたことが知られている。本稿が参照したビン・ガンナームの著作は 1985 年の出版であるが、ビン・ガンナームの著作はそもそも 1797/8 年から 1810/1 年の間には書き残されていたと考えられるので、本書の参照は検証として成立すると考えている。

筆者によるその検証によると、〈シャイフ〉が書簡を送ったアフマド・イブラーヒーム宛の書簡には、上述した Al-Yassini による説明のような文意をもつ記述は全くない。だが、同書簡の中には、〈シャイフ〉が、タクフィールに関して見解を著していた箇所を見つけることはできる。そこには、Al-Yassini による説明とも、従来のワッハーブ主義に関する説明とも全く異なる〈シャイフ〉の意外な見解が記されている。この見解について簡潔にまとめると、タクフィールしているのは、〈シャイフ〉ではなく、〈シャイフ〉を取り囲む誤った信仰を持つ者たちである²。

ここでは、Al-Yassini (1985) についてまとめると、〈シャイフ〉について「過激なタクフィールをする」と説明していたにも関わらず、実は、史料に書かれている内容を正確に読み解く作業を怠り、むしろ、ワッハーブ主義のタクフィー

ル観に関する固定観念を述べていたのである。

2.2 Helms (1981) による研究：引用の誤謬

Helms (1981) は、英国外交資料やアラビア語で著されたワッハーブ主義の教義を引用する重厚な研究書である³。同著は、第三次サウード朝に相当する 20 世紀のサウディアラビア王国の建国運動となったイフワーン運動⁴ に関して明らかにしようとする研究目的を掲げているが、ワッハーブ主義の教義に関する厚い記述を目指している。

Helms は、〈シャイフ〉が「信者の全てにムシュリキーン（多神教徒）への敵意を告白する義務を課した」という (Helms 1981, 85)。「信者の全て」に「義務を課した」という箇所は、特に〈シャイフ〉の過激な宗教的行動を指摘する意図が込められている。ただし、Helms によるこの説明への引用は、〈シャイフ〉の書簡ではなく、〈シャイフ〉の孫の一人であるウラマー（イスラーム学者）、アブドゥッラフマーン・ビン・ハサン・ビン・ムハンマド・ビン・アブドゥルワッハーブの書簡である (Helms 1981, 122, fn.12)。「信者の全てに〔……〕」を記した次の段落で Helms は、再び〈シャイフ〉の言葉を引用しているが、その引用も実は〈シャイフ〉の著作からではなく、それは、別のウラマー、アブドゥッラティーフ・ビン・アブドゥッラフマーン・ビン・ハサンの著作である (Helms 1981, 85; 122, fn.14)。このように、Helms は、〈シャイフ〉の著作を実際には引用していないのに、〈シャイフ〉の言葉として本文で著している。

Helms によると、ワッハーブ主義の最も重要な宗教的主張はタウヒードであり、ワッハーブ主義は三種のタウヒードを区別すると説明されている。つまり、タウヒード・ルブービーヤ (tawḥīd al-rubūbiyya; 唯一の神であるアッラーの主性)、タウヒード・ウルūヒーヤ (tawḥīd al-ulūḥiyya; 唯一の神であるアッラーの神性)、タウヒード・スィファート (tawḥīd al-ṣifāt; 唯一の神であるアッラーの名称や属性) である。

これらの三つは、学者によって微妙にニュアンスの異なる解釈が加えられる難解な概念である。だが、その中のタウヒード・ルブービーヤに関する Helms の説明に関する引用は、〈シャイフ〉の著作からではなく、アブドゥッラフマーン・

ビン・ハサンと、「サウディアラビアの文化運動」に関するバクリー・シャイフ・アミンからのものである。タウヒード・ウルーヒーヤに関する Helms の説明は、その一部分は〈シャイフ〉の著作の引用であるが、残りには引用は付されていない。タウヒード・スィファートに関しては、引用は何もつけられていない (Helms 1981, 89-90; 123, fn.11, 23, 24, 25)。つまり、Helms は、三種類のタウヒードについて説明する際に、必ずしも〈シャイフ〉の著作を引用したのではない。他のワッハーブ主義のウラマーを引用したり、おそらく、イスラーム学で知られている解説を記したりして、ワッハーブ主義のタウヒード観として描き出したのである。

また Helms は、イブン・タイミーヤのジハード観を説明したが (Helms 1981, 96-7)、それにより、〈シャイフ〉のジハード観を解説したと見做しているようである。その上で、ワッハーブ主義では、「ジハードのみが、アラビア半島から無知と道徳的後退を取り除くことができる」と信じられていると書いた (Helms 1981, 97)。ここで Helms は、ジハードを宗教戦争の意味で論じているが、この文は、「戦いのみ」を宗教の変革や宣教の方法と見なすワッハーブ主義は過激である、という意図で記載されている。ただし、このジハードに関する Helms の説明について気が付く問題点は、一つ目に、ワッハーブ主義のジハードとして引用している情報源は、〈シャイフ〉の著作ではなく、〈シャイフ〉の息子のウラマー、アブドゥッラー・ビン・ムハンマド・ビン・アブドゥルワッハーブの著作と、20 世紀のイフワーン運動に関する著作だということである (Helms 1981, 124, fn.48)。Helms は、さらに続けて、〈シャイフ〉によるジハードに関する記述を精査するのではなく、またもやイブン・タイミーヤのジハード観についての説明に帰る。このようなジグザグな検討の進め方は、イブン・タイミーヤと〈シャイフ〉のジハード観に相違がある可能性に関して、見過ごしている。

さらに Helms は、「抑圧的なスルターンは、フィトナ（ここでは内乱の意味）よりもよい」という言葉を引用しているが、これは、〈シャイフ〉の著作の引用ではなく、別のウラマーであるスライマーン・ビン・サフマーンの著作である (Helms 1981, 97, 124, fn.52)。

続けて Helms は、「ワッハーブ主義は、非妥協的で過激で、以上の分類⁵に無

差別的な姿勢をとった。どんなムスリムについても、どんな理由があったとしても、彼らのイスラーム解釈と対立し、彼らの権威に挑戦したものをカーフィル・ムルタッドと見做した」という。ここで、カーフィル・ムルタッドは、明確に定義されていないが、「最も厳しい制裁に責任を負うもの」とされたという (Helms 1981, 98-99)。だが、Helms は、この箇所に関する引用を付していない。そして続けて、Helms の説明は、1910～1930 年のイフワーン運動に関する説明に飛躍している (Helms 1981, 99)。Helms は、イフワーン運動に関する研究を第一の研究目的としていた。このために、〈シャイフ〉の著作を精査せずとも、ワッハーブ主義に関する説明は厚い記述に見えるが、Helms は、ワッハーブ主義に関する固定観念について説明できたので、〈シャイフ〉の教えに関しては粗雑に説明していたにもかかわらず、満足したのだとも言えるだろう。

以上のように、Helms は、〈シャイフ〉の著作を参照せずに、その息子、孫、スライマーン・ビン・サフマーン、その他の著者を引用して、ワッハーブ主義の教義として提示して解説している。しかも、その一部では、息子、孫、スライマーン・ビン・サフマーンを引用して、〈シャイフ〉の見解として提示した箇所すら見られる。これは、方法論上、あつてはならない誤謬なのではないだろうか。どうして Helms はそのような研究を著したのか。その理由については推測するしかないが、Helms が考えるところでは、サウディアラビアのウラマーは全員がワッハーブ主義者であり、加えて、ワッハーブ主義と見做される全ての学者の記述の間には、〈シャイフ〉を含めて、世代間や個人の差による相違は全くないという前提に基づいていると窺われる。また、〈シャイフ〉の宗教政治観やワッハーブ主義について、イブン・タイミーヤの宗教政治観と全く同じであると前提しているので、〈シャイフ〉の著作を引用せずとも、イブン・タイミーヤの説明で代用が可能となっている。

サウディアラビア史やワッハーブ主義に関する最新の研究動向から Helms の研究を振り返ると、Helms の引用した息子、孫、スライマーン・ビン・サフマーンは、第二次サウード朝以降のウラマーが多い。第二次サウード朝 (1820-89) に関する歴史研究は数少ないが、近年の研究は、〈シャイフ〉の没後、イスラーム学やイスラーム法学に裏付けられないタクフィールが発せられたとの指摘が

あり (Firro 2013)、重大な検討課題である。

2.3 Laoust (1939) によるオリエンタリスト的な研究

Laoust (1939) は、最も早い時期に著されたワッハーブ主義に関する本格的な研究論考である。Laoust (1939) は、ワッハーブ主義に関する代表的な研究の一つであるという印象をもたれてきた (Vassiliev 2000, 22)。Helms も Laoust を引用した (Helms 1981, 122, fn.6, etc.)。Laoust (1939) は、ワッハーブ主義に関する欧米での見方に強い影響を与えてきたと考えられる。ただし、フランス語で書かれたこともあり、同著に関する検証は難しいものとなってきたと言える。

Laoust (1939) の研究目的は、第一に、イブン・タイミーヤの教義に関して明らかにする点にあった。Laoust (1939) は、〈シャイフ〉の政治宗教観は、イブン・タイミーヤの模倣であるという論調を基本としている (Laoust 1939, 81, 93, 100, fn.38)。ただし、ワッハーブ主義のテキストを内在的な論理や主義主義的な観点から徹底して明らかにしようとする方法には限界が見られる。

Laoust (1939) は、西洋的な個人主義の観点や世俗主義の観点に立つ政治社会学な観察の結果として、ワッハーブ主義について、イスラームの来世に関する記述をそのまま信仰しているとか、ワッハーブ主義を全体主義的であると指摘している (Laoust 1939, 80, 91)。タクフィール観については、〈シャイフ〉によるアッラーの全能性に関する記述は、アッラーの全能性を恣意的で無制約なものとして描いていると言う (Laoust 1939, 86)。そして Laoust は、ワッハーブ主義では、アッラーが玉座に座っていると信ずるのは義務であり、それに疑問を差し挟む解釈に反対していると指摘している (Laoust 1939, 86)。このような分析視点は、Al-Yassini (1985) や Helms (1981) と比べると、特徴的である。

また Laoust は、ワッハーブ主義のジハード観については、ジハードは、キリスト教徒と戦うために預言者 (ムハンマド) の使命と共に始まり、最後の一人の人間がこの世からいなくなると終わるとされていると言う (Laoust 1939, 93)。さらに、ワッハーブ主義では、ジハードは、イスラームの信仰や道徳に違背する全ての集団に対して実行されなくてはならず、特に聖者信仰を認め実践する

全ての集団に対して実行しなくてはならないと信じていると言う (Laoust 1939, 93)。これらの Laoust による記述は、ワッハーブ主義が宣教のためにジハード以外の方法を選択せず、しかも永遠に戦い続けようとするかのように描いているが、ワッハーブ主義の過激性を過大視している。

Laoust は、〈シャイフ〉は、(法学的にはスナ派のハンバリー法学派と知られるが、)ハンバリー派の先達よりも簡単に不信仰と裁定した、と言う。また、ワッハーブ主義による不信仰宣言について、「多神崇拜〔フランス語では *associationnisme*〕への過ち以外には、誰も不信仰とは宣言できなかった〔……〕イスラームの公式なテキストや証明に裏付けられるイスラームの原則の一つにでも意図的に反する個人や集団は、即座に不信仰と判断され、流血に遭うのが合法である」としたと言う (Laoust 1939, 91)。Laoust は、ワッハーブ主義におけるタクフィールの慎重な裁定 (後述) に関して、全く気が付いていなかった。

現代のイスラーム学の水準を踏まえると、Laoust の論考は、タクフィール概念やジハード概念に関する精緻さを欠いている。また、Laoust の論考は、20 世紀初めまでのオリエンタリスト達の限界を共有している。つまり、イスラームについて、恣意的で非論理的、西洋やキリスト教に対して好戦的、過激、非合理的であるなどの固定観念を抱いている。〈シャイフ〉の教義に関しては、(Laoust 1939) は、1930 年代までの欧米やイスラーム世界のイスラーム研究の水準や傾向による時代的な拘束を受けていたと評価してよい。

以上、やや駆け足ではあるが、ワッハーブ主義に関して重要な先行研究である Yassini (1985)、Helms (1981)、Laoust (1939) について、時代を遡って検討した。だがそれらの研究には、重大な方法論上の課題が共通していたと言える。一つ目は、それらの研究が〈シャイフ〉の膨大な著作を適切に読み解く作業を欠いてきたという深刻な問題である。これは、ワッハーブ主義のウラマーの全てには相違がないとの前提の上で可能となってきた。二つ目は、ワッハーブ主義の教義は、イスラーム研究や歴史研究などの間接的な資料によって説明されてきた。だが、これは、ワッハーブ主義は過激であるとの固定観念に逆らわない限り、看過されてきた。そして、その検討は、既存のイスラーム研究で創られたイスラームに関するオリエンタリスト的な概念に依拠していた問題がある。特に、ワッ

ハーブ主義はイブン・タイミーヤの教義の模倣である、として説明されてきたが、これは、〈シャイフ〉の著作を引用しなくても、ワッハーブ主義に関して説明した成果になるかのような印象を先行研究において再生産してきたのである。

3. アラビア世界における先行研究

前節で検討した主に欧米世界で出版されてきた研究の他に、サウディアラビアやその他のアラビア世界では、別の傾向の先行研究が著されてきた。それらは、信仰者としてのムスリムの観点から、ワッハーブ主義のイスラーム学上の正当性を問う視点に立っている。ただし、それらには、宗教的立場の相違を越える学術的に高度な成果が蓄積されてきた。本節では、まず、ワッハーブ主義の過激性について検討する従来のムスリムの中でも誠実な観点に立つ代表的研究として、アリー・タンターウィー（‘Ali al-Ṭanṭāwī）師の研究を検討する。さらに21世紀に入り、イブン・タイミーヤやワッハーブ主義の教義は、これまで言われてきた程には過激ではないという見解を裏付けようとする専門的なイスラーム学的研究が著され始めているので、本稿では、サウディアラビアで出版された「イスラーム中道派研究」について検討する。

3.1 タンターウィーの〈シャイフ〉論：タウヒードの布教とムスリムとの戦いの葛藤

タンターウィーは、シリア出身で、ジャーナリストとして活動した後、シリアで1940～50年代に十数年にわたり裁判官を務め、1963年以降はサウディアラビアで宣教や教育活動に携わった。タンターウィーによる〈シャイフ〉に関する著作は、サウディアラビアに滞在し始める時期よりも前となる1961年の出版である。タンターウィーは、サウード朝に関する代表的な年代記の一つとされるビン・ビシュル（bin Bishr）⁶を参照して、〈シャイフ〉に関して考察した様子である⁷。

タンターウィーは、まずは序の中で、〈シャイフ〉について、アッラーのように完璧な存在ではない一人の人間であり、また預言者のように無謬でもない、と論じ始める。そして、〈シャイフ〉は、欠点や誤りに晒されないわけではない、

と言う。これは、タンターウィーが〈シャイフ〉の過激な宣教やジハードについて考えるための伏線となっている紹介の言葉である。

ただし同時に、タンターウィーは〈シャイフ〉の功績も確認している。タンターウィーは、〈シャイフ〉がムスリム世界に広めたイスラーム教の覚醒は、まずナジュド(〈シャイフ〉の宣教の地域となったアラビア半島中央部)で一般的になり、アラビア半島各地の近隣地域へ拡張し、さらにその周辺へ広まり、イスラーム世界の端にまで届いた、と指摘している。これは、アッラーの功德の中の功德によるものであり、アッラーが思召しになったから起きたのであると言う(al-Tantāwī 1961, 12)。タンターウィーによる〈シャイフ〉に関する高い評価は、欧米で出版される多くの研究が〈シャイフ〉を「過激」として低く評価してきた傾向とは対照的である。

さらにタンターウィーは、〈シャイフ〉はイブン・タイミーヤの教義を模倣したのか否かについて、短い考察ではあるが、欧米で出版される研究には見られない鋭い指摘を加えている。タンターウィーは、〈シャイフ〉は彼が師事した二人のウラマーから何を学んだか、について指摘したのである。〈シャイフ〉の一人目の特別な師となったアブドゥッラー・ビン・イブラーヒーム・ビン・サイフ(ʿAbdullāh bin Ibrāhīm bin Sayf)は、イブン・タイミーヤの著作の研究に自身を捧げていたという。そして、彼が準備してきた「武器」を見せてあげると言って、〈シャイフ〉にイブン・タイミーヤの著作を見せたのだという。また、〈シャイフ〉の二人目の重要な師は、〈シャイフ〉が遊学したメディナで師事したムハンマド・アッ＝スィンディー(Muḥammad al-Sindī)であった。タンターウィーは、〈シャイフ〉がタクフィールするようになったのは、このアッ＝スィンディーの影響ではないかと見ている(al-Tantāwī 1961, 15-17)。タンターウィーは、〈シャイフ〉がタクフィールするようになった〈シャイフ〉の学問的背景として、イブン・タイミーヤばかりではなく、アッ＝スィンディーの影響に注目している点が興味深い。

なお、イスラーム史研究を専門とする John Voll は、アッ＝スィンディーの〈シャイフ〉への影響について、アッ＝スィンディーの学者や教育者としての活動を歴史的に探る丁寧な研究を残した。そして、アッ＝スィンディーの下に

世界各地から集まる弟子たちは、アフリカやインドにおけるイスラーム改革運動に関して当時のメディナに情報をもたらし、それが〈シャイフ〉に世界各地の18世紀のイスラーム復興について知らせていたのは間違いなく、〈シャイフ〉に知的な刺激を与えていただろうと論じている (Voll 1975, 38-9)。Voll は、タンターウィーとは異なる史料を検討したが、両者は、〈シャイフ〉によるイスラームの刷新運動はイブン・タイミーヤに由来するとは必ずしも考えなかった点で共通している。

タンターウィーの説明に戻ると、彼は、第一次サウード朝によるジハードと宣教について、思索を巡らせている。〈シャイフ〉とサウード家には、「戦う権利があったのか」、「他者の財産を奪う権利があったのか」、「人々を殺害する権利があったのか」、「他者の国々を破壊する権利があったのか」と問いかけた (al-Ṭanṭāwī 1961, 36)。

タンターウィーがこのように考えた理由は、一般的によく知られるムスリムに関する定義の問題が関わっている。ムスリム世界で最も多くのウラマーは、ムスリムとは誰かという定義に関して、アッラーと預言者ムハンマドに対する2つの信仰を告白する限り、ムスリムであるとの原則が確立している (小杉 2002 b)。つまり、イスラーム教のスナ派は、六信五行をはじめとする規範を整えているが、信仰告白さえ認めているのであれば、ムスリムと承認される緩やかな規範体系であると知られている。この点を考慮してタンターウィーは、ワッハーブ主義について、タウヒード信仰の回復を目指したイスラームの刷新運動であったとはいえ、ムスリムを自称する者たちに対して次々と戦いを挑んだり、戦利品として他のムスリムの物品を奪ったり、戦闘中にムスリムを殺害することが許されることだったのか、と問いかけたのである (al-Ṭanṭāwī 1961, 36)。

そして、タンターウィーは、「私は、今に至るまでこの問いに答えを見出せない」と言う (al-Ṭanṭāwī 1961, 36)。タンターウィーが悩む理由の1つは、スナ派正統カリフのアブー・バクルが教友と戦ったリッダの戦い⁸について、ムスリムと自称する者に対する戦いだと認識しているからでもある。つまり、タンターウィーは、リッダの戦いで反乱者たちは、ザカー (喜捨) の支払いをしないとはいえ、ムスリムを自称していたと考えている。そのため、スナ派では範

例とされる正統カリフですら、ムスリムに対する戦いをしかけたのではないか、そして〈シャイフ〉は正統カリフと同じくムスリムに対して戦ったのか、と悩んでいる (al-Tantāwī 1961, 36)。

タンターウィーがワッハーブ主義について悩む2つ目の理由は、〈シャイフ〉の率いる第一次サウード朝の戦闘での戦術に関わっている。イスラームは、戦争の際に宣戦布告を規範としている。ところが、年代記でも伝えられている通り、サウード朝の戦いは、奇襲が多くを占めていた。また、イスラームでは禁じられているが、戦う相手の農地を破壊した。女性に危害を加えたという歴史的記述は何も見られない点で戦士達にはモラルが保たれていた。だとしても、ジハードの開始後、サウード朝は領土を拡大し、その首都ディルイーヤは地域で最も大きな定住地へと発展した。宣教をめぐる紛争をきっかけにサウード朝の敵となった周辺の指導者たちは、殺害された者も数多くが記録されている。これらの戦史について思索したタンターウィーは、ワッハーブ主義・サウード朝の戦闘はイスラームで許される戦い方だったのかと問いかけていたわけである⁹。

タンターウィーの葛藤は、真摯なムスリムなら直面する類のものだと言えるだろう。イスラームでは、タウヒードの普及が至上の価値であるとされる一方で、ムスリムに対する暴力は許されてはいない。この点でタンターウィーにとり、ワッハーブ主義は宣教と暴力の関連について答えを見出せない歴史として考えられたのであろう。

3.2 アラビア世界における最新研究：イスラーム中道派的なタクフィールやジハードに関する研究の蓄積

2009年にサウディアラビアでは、『中道派事典』と題するイスラームの論集が出版された (Āl al-Shaykh 2015)。この著作は、現代サウディアラビアのワッハーブ主義を社会性、開放性、穏健性、論理性を特徴とする思想体系として、アラブ人に参照可能とする成果を挙げた。この論集の中のジハードとタクフィールに関する論文に関する拙稿の成果によると、『中道派事典』は、イブン・タイミーヤや〈シャイフ〉のタクフィール観とジハード観について、どちらも中道的だったと主張している。この指摘は、サウディアラビアのワッハーブ主義思想が過

激なグローバル・ジハードの思想的土壌であるなどに見做す見解にとっては意外な指摘であろう。

ただし、『中道派事典』における研究は、クルアーン、ハディース、思想研究などの方法によって裏付けられているが、〈シャイフ〉のタクフィール観とジハード観が中道的であると見做す指摘については、〈シャイフ〉の著作に関する十分な検証によって証明されたとは到底言えない。

タンターウィーの研究とサウディアラビアにおける中道派研究プロジェクトの成果をまとめると、アラブ世界でも、〈シャイフ〉の著作が必ずしも十分に検証されてはいないという問題点が浮かび上がる。前節とまとめると、欧米でもアラブ世界でも、ワッハーブ主義に関する先行研究では、〈シャイフ〉の著作が十分に検証されていない問題点が判明した。

3.3 本稿の研究手法：原典の解析とイスラーム中道派に基づく評価

本項では、本稿の研究方法を明示する。1つ目に、〈シャイフ〉の著作の中でも、書簡集と小論集について検討する。〈シャイフ〉は、当時のイスラーム世界の学者の水準の中で、クルアーンやハディースに関する圧倒的に膨大な知識をもとに、学者や宣教者としての活動を展開した。〈シャイフ〉の著作には一定の高度な論理性を認めることができるが、書簡と小論集は、〈シャイフ〉による弟子や宗教上の敵との対話の集積であり、対話を通じてその時々には宣教者としての考えを書き連ね、展開していく文体である。〈シャイフ〉が、〈シャイフ〉の生きた時代や地域をどのように考えたのか、それは、〈シャイフ〉の書簡集に現れたと考えられる。そこには、学者としての語りが基本であるとはいえ、理論的著作には現れない生々しい世界観が浮かび上がると考えられる。多神崇拜が中心の話題となった〈シャイフ〉に関する諸著作では論点の中心とはならなかったジハードやタクフィールの問題に関しても記述を見い出すことができる。

2つ目に、書簡集と小論集を参照するための資料として、ビン・ガンナームの著作を検討する。ビン・ガンナーム（d. AD.1810/1）は、〈シャイフ〉が生きていた同時代のウラマーであったが、「シャイフ（d. AD.1792）」よりも長生きした。ビン・ガンナームは、記録した文面を〈シャイフ〉に見せながら、bin

Ghannām (1985) を書いていたと言われている。

bin Ghannām (1985) は、ビン・ガンナームが著した部分と〈シャイフ〉の著した部分に分かれる。ビン・ガンナームが著したのは、〈シャイフ〉が出現する直前のナジュドの置かれた歴史状況と、戦いの年代記¹⁰である。また、〈シャイフ〉の書簡集 (26 通)、〈シャイフ〉の小論集 (23 点)、〈シャイフ〉によるクルアーンの注釈 (20 章) が取められている。ビン・ガンナームが著した部分は、〈シャイフ〉の見解と一致していると考えられている。本稿は、どちらも引用するが、〈シャイフ〉の書簡集と小論集に関して集中的に検討した成果を中心に組み立てている。〈シャイフ〉の書簡と小論は、ビン・ガンナーム以外のワッハーブ主義ウラマーの論集にも所収されているが、それらでは〈シャイフ〉の書簡や小論を部分的に収録している場合があり、ビン・ガンナームの著作が最も包括的な論集であると考えられる。

本稿では、〈シャイフ〉の書簡 (Al-Risāla) を引用する際には、bin Ghannām (1985) に記された書簡の番号と書簡の発信者と送信相手を記し、bin Ghannām (1985) でのページを併記する。〈シャイフ〉の書簡には日付が残されていないので、それは本稿で記すことはできない。〈シャイフ〉の小論 (Al-Mas'alat) を引用する際には、bin Ghannām (1985) に記された小論の番号と bin Ghannām (1985) でのページを併記する。〈シャイフ〉の小論には、その題名や日付が残されていないので、それらは本稿で記すことはできない。

3 つ目に、〈シャイフ〉の書簡集や小論集を検討する際には、クルアーンやハディースをどのように引用して、〈シャイフ〉が意見を展開していたのか、注目する観点となる。クルアーンやハディースは、すべてのムスリムの「共有文書」であるが、その引用の仕方には著者それぞれの個性が反映されるからである。〈シャイフ〉は、クルアーンのある一つの句の一部分のみを引用する場合があるが、本稿では必要に応じて、そのクルアーンの句全体を引用した。

4 つ目に、『中道派事典』の「中道的タクフィール」と「中道的ジハード」を評価基準として、〈シャイフ〉の教義は中道的と認められるのか否かについて検討する。このために、拙稿 (Nakamura 2019) を元にして、「中道的タクフィール」と「中道的ジハード」についてまとめる。

「中道的タクフィール」は、以下のように定義する (Nakamura 2019, 314-6)。

- (a) タクフィールの裁定では、誤りは赦されないために、慎重な裁定が期される。信仰 (īmān) か不信仰かの裁定は、ムスリムの外面 (zāhir: 発話と行為) と内面 (bāṭin) の思考が、教義と整合しているか、で判定される。
- (b) 不信仰は、大クフルと小クフルに分類される。小クフルは、不信仰の下位分類ではあるが、罰せられない。小クフルには、以下の下位分類が該当する。
 - i. 偽信者 (munāfiq): ある信者が、意図が不信仰に陥っているが、行為は不信仰者の行為ではない場合。スンナ派は、偽信者は不信仰者と裁定されてはならないと考える。
 - ii. 断片的な不信仰 (al-kafariyāt al-maqtū'): ある信者が、外見では不信仰に見えるが、自分自身は不信仰だと見なしていない場合。
 - iii. 信仰と不信仰の観点から、外見の行為が両義的であると裁定される場合。
 - iv. 行為と行為者が分離される場合: 行為は証拠により不信仰と裁定されるが、意図は不信仰ではない場合
- (c) 殺人罪など、ハッド刑の有罪者には、不信仰の裁定は該当しない。また、「中道的タクフィール」は、クルアーン第4章94節、「…あなたがたに挨拶する者に向かって『あなたがたは信者ではない。』と言ってはならない…」を根拠として、タクフィールを規制する。

「中道的ジハード」は、以下のように定義する (Nakamura 2019, 319-321)。

- (a) 「ジハードの中道」は、ムスリムに対するジハードを受け入れない。戦いのジハードは、異教徒に対する戦闘を指すのであり、ムスリムのコミュニティの中の紛争や内戦を指す概念ではない。ムスリム内の無秩序、反乱、破壊は、ヒラーバ (hīrāba) に該当し、ハッド刑により処罰される。

- (b) 「中道的ジハード」は、ジハードの正当な動機として、防衛的ジハードを認め、攻撃的ジハードを認めない。
- (c) ジハードは、四段階で規定されている。第一段階は、戦闘の禁止である。この段階では、戦闘は抑制され、武装は許可されるが、和平の提案や交渉が求められる。第二段階では、戦闘の許可が発せられる。第三段階では、戦闘命令が発せられ、第四段階では全ての多神仰者に対する戦いが発せられる。
- (d) 宣教のための侵略は許されない。

次節以降では、「中道的タクフィール」の (a) ～ (c) と、「中道的ジハード」の (a) ～ (d) を評価基準としつつ、ビン・ガンナームの史料を参照して〈シャイフ〉の教義を検証する。

4. 〈シャイフ〉の主意主義的なタウヒード観、タクフィール観、ジハード観

本節では、bin Ghannām (1985) を史料として、〈シャイフ〉の書簡と論集を読み解き、彼の主意主義的なタウヒード観、タクフィール観、ジハード観を検討する。

4.1 タウヒード観

欧米のワッハーブ主義に関する研究は、ワッハーブ主義の過激なタクフィールを指摘するが、『中道派事典』のイスラーム中道派研究は、〈シャイフ〉は多神教徒を不信仰と裁定しなかったと述べる (Nakamura 2019, 324)。以下では、〈シャイフ〉の著作に現れるタクフィール観の検証を進める。

〈シャイフ〉は、タウヒードの重要性を解説するためにクルアーン第 112 章 1 節を引用している。そして、「言ってやるがいい。『かれはアッラー、唯一なる御方であられる』」という句は、「クルアーンの三分の一」(に相当する重要性)があるという¹¹。

〈シャイフ〉は、当時の多神崇拜者たちは、預言者の時代の不信仰者たちよりも酷く道を踏み外していると考えていた。その理由の一つ目に、人間はアッ

ラーに対する恩を忘れてしまうという。二つ目に、当時の多神崇拝者は、イエスや天使にも匹敵しない存在である人間を（崇拝の対象として）唱えている¹²。

〈シャイフ〉のタウヒード・ルブービーヤ（神の一神性の主性）に関する説明は、クルアーン第23章86節の引用である。「言ってやるがいい。『7つの天の主、栄光に満ちた至高の玉座の主は、誰であるのか』」¹³。タウヒード・ルブービーヤに違背する信仰の例としては、クルアーン第9章31節を引用して、聖者（律法学者）や聖力を持つという修行者（修道士）をあげている。「かれらは、アッラーにおいて律法学者や修道士を自分の主となし、〔……〕」¹⁴。ムスリムの辛抱、満足、服従、信頼、懺悔、委任、愛情、恐れ、願掛けについては、タウヒード・ルブービーヤの結果であるという¹⁵。

他方、タウヒード・ウルーヒーヤは、タウヒード・ルブービーヤの結果であるという。タウヒード・ウルーヒーヤは、思索無しに知ることはできないという¹⁶。タウヒード・ウルーヒーヤとして引用されているクルアーンの句は、第47章19節である。「だから知れ。アッラーの外に神はないことを。そしてあなたの罪過に対し御赦しを請え。また信仰する男たち、信仰する女たちのためにも御赦しを請え。本当にアッラーは、あなたがたの働き振るも、休み方も〔凡て〕知っておられる」¹⁷。

〈シャイフ〉の引用するクルアーンの句から判断すると、タウヒード・ウルーヒーヤは、一切の不安や迷いなくアッラーへの信仰が内面で完全に確立していると同時に、外見に現れる信仰行為が実践されているという二つを意味しているようである。別のクルアーンの句、第41章30節が引用されている¹⁸。「本当に、『わたしたちの主は、アッラーであられる』と言って、その後正しくしっかりと立つ者、かれらには、〔次から次に〕天使が下り、『恐れてはならない。また憂いてはならない。あなたがたに約束されている樂園への吉報を受け取りなさい』〔と言うのである〕」。

タウヒード・ウルーヒーヤとは何か。〈シャイフ〉によると、アッラーは彼以外には唱えられず、頼られるものはいない。また、彼に並ぶものはなく、彼以外には助けを求められてはならない。彼の御名以外で畜殺はされてはならない。彼以外に対して誓いを立ててはならない。彼の側に同伴者はおらず、彼に向かつ

て遣わされる預言者はいない。そして、彼以外に対して助けを求める者は不信仰である。さらに、彼以外に対して誓いを立てる者は不信仰である¹⁹。

〈シャイフ〉は、なぜ、タウヒード・ルブービーヤに関する信仰者は、タウヒード・ウルーヒーヤの信仰者にならないかについて自説を述べている。その説明は、非常に難解である。「問題の秘密は、信仰は部分から構成されていることである」と書いている。〈シャイフ〉は、続けて述べている。

全ての行為は《アッラーの他に神無し》から生ずると言う者がいるが、その言葉は真実である。また、こう言う者がいる。「心に、塵の重さほどの信仰があるなら、火獄から出ることができる」。その言葉も真実である。私があなた方に書いた理由は、信仰が部分から構成されているからである。信仰〔īmān〕が部分から構成されていることを見過ごすようになったことによって、アブ・ハニーファ〔ハナフィー法学派の始祖〕とその一派の主張には、「行為は、信仰とイスラームから生ずるのではない」と考える間違いが起ったのである。²⁰

〈シャイフ〉が彼のタウヒード観を正当であるとする強力な根拠は、偶像崇拜の禁止は、正統カリフやスンナ派四学派と共有されていると確信しているからである(bin Ghannām 1985, 49-50, 56)。ビン・ガンナムは、「四人の正統カリフの時代には、毎日、五回、モスクで祈っていたが、墓には行かなかった」(bin Ghannām 1985, 56)と書いている。また、「真実は、神の書〔クルアーン〕と預言者のスンナ〔言行〕によってもたらされ、教友の言葉と行為であり、四人のイマーム〔スンナ派四法学派の始祖〕が選んだものである」(bin Ghannām 1985, 29)と書いている。

ビン・ガンナムは、スンナ派四法学派の一つ、マーリク派の始祖については、預言者の墓で祈るのを嫌っていたのであり、その行為は教友たちのしていなかった新奇物であると言う(bin Ghannām 1985, 55)。ビン・ガンナムは、スンナ派四法学派の四人の始祖は模倣(taqlid)を批判したり、根拠のない言葉を信じたりする者を批判したとした上で、シャーフイー法学派の始祖シャー

フィイーは、「根拠のない言葉を求める者は、夜に薪を集める人夫が知らぬ間に毒蛇に噛まれるようなものであると喩えた」という言い伝えを引用している (bin Ghannām 1985, 42)。ただし〈シャイフ〉は、ハナフィー法学派の始祖に関しては、先に引用したように「信仰が部分から構成されていることを見過ごす」間違いをしたと書いている。そこで、大変に珍しいことに、ハナフィー法学派については、〈シャイフ〉の見解と、ビン・ガンナーの見解はやや食い違っているのかもしれない。

〈シャイフ〉は、信仰とは、タウヒード・ルブービーヤの水準では十分ではなく、タウヒード・ウルーヒーヤの高みにまで達することを求めている。また、彼の宣教は、イスラームの正統カリフや、ハナフィー派を除く四法学派と共有されていると確信していたようである。

4.2 タクフィール観

〈シャイフ〉は、不信仰とは何か、不信仰の裁定をどう考えたのか。〈シャイフ〉のタクフィール観は、「中道派のタクフィール」観の枠内にあるのか。本稿では、〈シャイフ〉の不信仰の概念、不信仰の裁定方法、タクフィール観を検討し、〈シャイフ〉の議論を「中道派タクフィール観」を基準として評価する。

まず、〈シャイフ〉は、不信仰は間違いであると考えている。〈シャイフ〉は、『不信仰は恩恵である』という言葉は、アフマド・ハンバル〔ハンバリー法学派の始祖〕も反駁した間違いである」と書いている²¹。

次に、〈シャイフ〉は、タクワー（アッラーへの畏怖、敬神）は、イスラームと不信仰を分ける根本問題であるとしている²²。〈シャイフ〉は、クルアーン第49章13節を引用した。「〔……〕アッラーの御許で最も貴い者は、あなたがたのうち最も主を畏れる者である〔……〕」²³。

〈シャイフ〉は、内面と外見の区別について思考している。曰く、「イスラームは外見の行為であり、信仰〔īmān〕は内面の行為である。ハディースにもある、『イスラームは公然とすること、イーマーンは心の中にある』。ハディースにもある、『心に、塵の重さほどの信仰があるなら、火獄から出ることができる』。信仰はイスラームより高位である。人間は信仰からイスラームへ入る」²⁴。

〈シャイフ〉は、彼のタクフィール観が中道派タクフィール観と同じく、慎重な裁定を教義としていると確かめることのできる見解を書き残している。「ある人物についてわずか一語で不信仰と裁定しようとして、正しくわかりますか」²⁵、「それ〔行為がイスラームか否かに関して〕を憶測により不信仰とは宣言しない。なぜなら、納得は憶測により生じない。また、不信仰なのかについてわからない者について、その人に関して矛盾することが言われている場合、不信仰と宣言はしない。我々はそれを実行はしない」²⁶。

〈シャイフ〉は、多神崇拝や不信仰の問題と、大罪や重罪は別の分類であり、軽罪や小罪はさらに別の分類であると明言している²⁷。

以上の〈シャイフ〉の言葉からは、〈シャイフ〉のタクフィール観が「中道派タクフィール」の(a)～(c)を共有していると十分に判断できると考えられる。ただし、〈シャイフ〉は、中道派タクフィール(b)のi～ivのような明確な分類を列挙したわけではない点で、現代イスラーム研究の高度な理論形式を身に付けていたわけではないとは言える。

では、〈シャイフ〉のタクフィール観が「中道派タクフィール」に該当するのなら、どうして〈シャイフ〉は、タクフィール論争に巻込まれてきたのだろうか。特に〈シャイフ〉は、自分が他のムスリムをタクフィールしたとは認識していないのである。この問いへの回答は、〈シャイフ〉は、彼が宣教しようとしている相手が憶測に基づいて〈シャイフ〉を中傷しようとしている、と認識している点にある。「〔私〈シャイフ〉が宣教すると〕各地域でウラマーと自称する者たちが、タウヒードを支持して多神教を否定すると言うにも関わらず、私に対して不信仰を宣言して、戦いを挑んできたのである」、「あなたがたは、私に関して、私が彼ら〔論争の相手〕について不信仰だと裁定していると、支持集団と共に述べている。止めて欲しい、そんなことは決してしない」²⁸。

〈シャイフ〉は、憶測に基づいてアッラーについて考えてしまう誤りに陥る者(この段落では以下の彼ら、あなたがた、悪事を行う者)とその帰結について、クルアーンの四つの句をつなぎ合わせて論じている。「〔……〕〔彼らは〕アッラーに対し間違った(多神、無神論者の)考え方をして愚かな臆測を〔する〕〔……〕」(第3章154節)、「〔……〕かれらはアッラーに就いて、悪い見解で臆測する者〔……〕」

(第48章6節)、「[……] あなたがたの主に就いて考えたこのことが、あなたがたを破滅に落し入れ、[……]」(第41章23節)、「[……] 誰でも悪事を行う者は、その報いを受けよう [……]」(第4章123節)²⁹。

〈シャイフ〉がタウヒードに反すると見做した者達に関して、ビン・ガンナームの見方は特徴的である。ビン・ガンナームは、彼らは、本当は正しい信仰が何かを知っていると書いた。曰く、「この罪を犯す者の多くは、〈シャイフ〉には真実と正しい判断が現れており、それは真正なる唯一のタウヒードなのだということを受け入れている。だが彼らは、自分達の頭領に従い、真実に回帰するのを軽視する。そして、自分の権威を喪失し、彼らの現世利益と指導者の支配を奪取されるのを恐れている。彼らの多くが、墓、木、偶像、石に対して行っていることは醜い多神崇拝であると既に集会において表明した。それらは、悔悛やアッラーの許し無しでは根絶できないものである」(bin Ghannām 1985, 38)。

〈シャイフ〉は、信仰上、自分の知識や結論の及ばない問題に関しては、「わからない」と結論して、判断を下さない姿勢を保っていた。それは、ハンバリー法学派における法解釈上の特徴であるとも知られてきた。そこで〈シャイフ〉は、自分の宗教的見解について、絶対的に正しい根拠であるクルアーンとハディースによって裏付けられると確信のある解釈のみを主張した。

他方、この姿勢は、〈シャイフ〉が謙虚な人柄であるという印象を生み出していた。〈シャイフ〉は、クルアーン第4章59節を引用している。「あなたがた信仰する者よ、アッラーに従いなさい、また使徒とあなたがたの中の権能をもつ者に従え。あなたがたは何事に就いても異論があれば、アッラーと終末の日を信じるのなら、これをアッラーと使徒に委ねなさい。それは最も良い、最も妥当な決定である」³⁰。また、〈シャイフ〉は、クルアーン第17章36節を引用している。「またあなたは、自分の知識のないことに従ってはならない[……]」。〈シャイフ〉は、クルアーン第17章85節を引用して、人間の知識には限界があるという彼の理解を示している。「[……] [人びとよ] あなたがたの授かった知識は微少に過ぎない」³¹。そして〈シャイフ〉は、ハディースを引用している。「現れたように、通過しなさい」。その意味は、「知識のない解釈の影響を受けないよ

うに」と注釈されている³²。実際に、〈シャイフ〉が信者から質問されて「わからない」と回答した例が、三つは書き残されている³³。

〈シャイフ〉のタクフィールに関する考えは、現代イスラーム学のように類型化や論理的に体系化された様式では著されていなかったが、タクフィールの裁定を慎重に見極めようとする「中道派タクフィール観」を共有していたと評価できる。ただし、あらゆる先行研究が指摘していなかった〈シャイフ〉のタクフィール観の特徴は、当時、タクフィールをしていたのは〈シャイフ〉ではなくて、〈シャイフ〉が宣教の対象としていた「誤った信仰をしている者たち」の側であると認識していた点である。そして〈シャイフ〉は、自分は、正しいイスラームをクルアーンとハディースという明証された根拠に基づいて宣教しているにもかかわらず、宣教上の敵は、憶測に基づいて〈シャイフ〉を不信仰と中傷していると考えていた。

4.3 戦いのジハード

先行研究は、ワッハーブ主義が宗教的な敵に対して過激な戦いを繰り広げるという欧米での研究、〈シャイフ〉は正当なジハードをしたのか悩む良心的なムスリムの見解、中道派ジハード論の三つの見解に大別できた。

〈シャイフ〉は、ジハードには慎重に出動しなくてはならないという戒めをクルアーン第4章94節を引用して書き残している。

信仰する者よ、あなたがたがアッラーの道のために、出動するときは、〔慎重に〕事態を見きわめ、あなたがたに挨拶する者に向かって、「あなたがたは信者ではない。」と言ってはならない。あなたがたは現世の生活上の消費やすい財貨を求めるが、アッラーの御許には、夥しい戦利品がある。以前あなたがたもそうであったが、アッラーは御恵みを与えられる。だから〔慎重に〕行動しなさい。誠にアッラーは、あなたがたの行うことを熟知なされる。³⁴

〈シャイフ〉は、タクフィールは慎重に裁定して、ジハードは慎重に出動しなくてはならないという戒めについて、クルアーン第49章6節を引用して書き

残している。「信仰する者よ、もし邪な者が情報をあなたがたに^{もたら}齎したならば、慎重に検討しなさい。これはあなたがたが、気付かない中に人びとに危害を及ぼし、その行ったことを後悔することにならないためである」³⁵。

以上のように、〈シャイフ〉は、中道的ジハード論のように宗教多元的なクルアーンの句を引用 (Nakamura 2019, 319) したりはしなかったが、だとしても、慎重にタクフィールを裁定し、ジハードの発動は慎重に見極めようとしていた。そこで、〈シャイフ〉のジハードは、中道派ジハード論に近いと考えられる。すると〈シャイフ〉は、なぜ、次々と戦闘に巻き込まれていったのか。〈シャイフ〉は、ワッハーブ主義＝第一次サウード朝が、宗教的な論争の相手と戦闘に陥っていく過程に関して書いている。〈シャイフ〉は、彼が宣教の対象とした者たちが、自分に濡れ衣をかけたという趣旨を書いた。

彼らは、私がイスラームの民を不信仰宣言したり、また彼らの財産を奪おうとしたりした、また、彼らの半島〔アラビア半島〕には不信仰者は一人もいないと主張した。³⁶

〈シャイフ〉は、暴力を行使し始めるのは、タウヒードに違背している者たちの側であると考えている。ビン・ガンナムは、このように書いている。

多くのウラマーは、ベドウィンの指導者たちを訪れ、彼らの生活地域で礼拝するよう、また、アザーン（礼拝への呼びかけ）を聞くように警告した。ベドウィン達は、拳や鞭を握りしめ、彼らに突進してきた。そのような振る舞いは、真実に対する抑圧であり、〈シャイフ〉に対する憎悪である。(bin Ghannām 1985, 39)

〈シャイフ〉は、宗教をめぐる論争が、戦いに発展する過程を書いている。

もしもウラマーの書いたことが全ての書物と相違した場合にはどうするか〔……〕ウラマーの記述には、ハンバリー法学派と他の法学派の間で、ある

程度の合意がある。しかし、人々の習慣に関する相違が問題となり始めている。彼らは、私を否定するように〔人々を〕仕向けている。書物を参照すれば、私の述べたことが真実だとわかるだろう。しかし彼らは私を襲ってくる。アッラーの予言したように。³⁷

そして、ビン・ガンナムは、リヤードの首長であるダッハームは、〈シャイフ〉の宣教を一度は受け入れたにも関わらず、〈シャイフ〉を裏切り、戦いを挑んできたと書き残している。

ダッハームが敵対を明言し、裏切りが発見された。そして、〔〈シャイフ〉は、〕ムハンマド・ビン・サウードに戦争の権限を与えた。(bin Ghannām 1985, 97)

以上のような認識の中で、ワッハーブ主義・サウード朝は、最初の戦いに巻き込まれていった。つまり、戦いを開始したのは、ワッハーブ主義・第一次サウード朝の側ではなく、宗教的な敵の側であったと見做している。つまり、〈シャイフ〉の側は、大極的に言えば、攻撃を受けたのでジハードに巻き込まれたと認識している。

〈シャイフ〉の巻き込まれた戦いが「防衛」のために始まったのであれば、〈シャイフ〉のジハード観は、防衛ジハード論が該当したのではないかと考えられよう。だが、〈シャイフ〉のジハードに関する記述には、現代的な「防衛」という語は使われてはいない。

〈シャイフ〉は、預言者は不信仰者たちと戦った、と確認している。クルアーン第39章3節を引用し、アッラーを差し置いて他を信仰しようとした者たちについて、『[……]「わたしたちがかれら（神々）に仕えるのは只わたしたちがアッラーの御側に近づくためである。」[……]』と確認した³⁸。また、〈シャイフ〉は、ジハードはタウヒード・ウルーヒーヤのためである、と書いた。

預言者が戦った多神教徒たちは、タウヒード・ルブービーヤを知っていた。

彼らについて明白な証拠が示されていたのである。預言者は、タウヒード・ウルーヒーヤのために戦った。人間は、タウヒード・ルブービーヤだけでタウヒード・ウルーヒーヤを伴わないのであれば、イスラームには入っていない。³⁹

また、タンターウィーが、リッダの戦いについて、正統カリフによるムスリムに対する戦いなのではないかと葛藤したと紹介しておいたが、〈シャイフ〉はリッダの戦いについて、ザカーをめぐる争いではなく、正統カリフがタウヒードの実現のために戦ったと見做す歴史観を書いている。この歴史観の展開において、〈シャイフ〉には、タンターウィーが悩んだような逡巡は一切感じられない。

〈シャイフ〉は、ウマルが、ザカーの支払いを拒否しようとする戦闘部隊が彼に対して結成されたときについて書いている。

《アッラーの他に神無し》を言うまで、戦うように人々に命じた。もしも、彼らがそれを口に出して言えば、彼らは、流血や権利以外の財産から逃れている。

続けて〈シャイフ〉は書いた。

アブー・バクルは述べた。「ザカーは、彼らの権利である。もしもザカーを拒否したら、《アッラーの他に神無し》の権利は拒否される」。⁴⁰

このように、〈シャイフ〉は、リッダ戦争について、ザカーの支払拒否やムスリムに対する戦争の問題ではなくて、信仰告白に関わる点で重要だと認識していたのである。そして、信仰告白は、最も重要な教義であるタウヒード・ウルーヒーヤに関わる事項であると考えていた。したがって、自称「ムスリム」に対する正統カリフの戦いは正当であり、同じく、自身のジハードも正当であると確信していた。

〈シャイフ〉は、戦う相手となる不信仰を四種類に分類した。第1番目の種類は、

タウヒードが現されたことを知っている者である。また、石、木、人間に対する信仰は、多神崇拝だと知っている者である。〈シャイフ〉は、彼らが、知っていたのか、それとも知らなかったと否定するか、確認した後で、不信仰と宣言すると書いている⁴¹。

第2番目の種類は、タウヒードに関する以上の全てを知っており、実行していると主張しているが、預言者の宗教への罵りが明らかである場合である。クルアーン第9章12節を引用している。「だがかれらがかもし誓約した後にそれを破り、あなたがたの教えを罵るならば、不信者の首長たちと戦え。本当にかれらには誓いはないのである。恐らくかれらは止めるであろう」⁴²。

このクルアーン第9章12節の句については、二つの要素が戦う相手の条件に含まれている点に気がつく。一つ目には「信仰を誓約した後にそれを破る」という要素であり、二つ目には「イスラーム教を罵る」という要素である。〈シャイフ〉は、このクルアーン第9章12節を引用する際に、「預言者の宗教への罵り」と記して、イスラーム教への罵りの問題として著した。しかし、ここで指摘したいのは、「信仰を誓約した後にそれを破る」という要素は、戦うべき敵を同定する基準として〈シャイフ〉のジハードの実践では強く認識されていたのではないかと、という点である。先にあげたリヤードとの開戦がこれに該当する。そして、〈シャイフ〉（第一次サウード朝）は、一度、ジハードの対象と認識した敵に対しては、戦闘における戦術で防衛的である方針にこだわった様子は全く見られない。

第3番目の種類は、タウヒードを知っており、それに愛着があり、それに従う。また多神教を知っており、それを放棄した者であるのだが、タウヒードに入信した者を嫌いであり、そして、多神教に残った者の方が好きである。〈シャイフ〉は、クルアーン第47章9節を引用している。「それというのも、かれらがアッラーが下されたものを嫌ったため、かれはその行いを無効になされる」⁴³。

第4番目の種類は、以上の他に、タウヒードに敵対し、多神教に従い、戦いに急ぎ、タウヒードの民に対して戦う町や村の民がいて、これも不信仰者であると書いている。〈シャイフ〉は、クルアーン第4章91節を引用している。「外のある者は、あなたがたから安全を望み、また、自分の人びとも安全であり度いと望むのを、あなたがたは見るであろう。かれらは試みにあう^{たび}度に、それら（の

誘惑)に陥り転落する。それでかれらがもし退かず、あなたがたに和平も求めず、また手を納めないなら、ところかまわずかれらを捕え、見つけ次第かれらを殺せ。これらの者に対しては、われはあなたがたに、明白な権能を授ける」⁴⁴。

以上を要約すると、〈シャイフ〉は、ジハードの対象として、第一番目の種類に、慎重に不信仰か否かを確認した後で不信仰と裁定される場合、第二番目の種類として、タウヒードや多神教についての知識があるがイスラーム教を罵る者の場合、第三番目の種類として、自身はタウヒードを実践して多神教を放棄したが、タウヒードを実践している者を嫌いで多神教の実践者を好きであるという者の場合、第4番目の種類として、タウヒードの民に対して戦う町や村の民をあげていた。

〈シャイフ〉は、確かに「中道のジハード観」を共有している。〈シャイフ〉は、クルアーン第60章8節の宗教戦争を禁ずる有名な句を引用している。「アッラーは、宗教上のことであなたがたに戦いを仕掛けたり、またあなたがたを家から追放しなかった者たちに親切を尽し、公正に待遇することを禁じられない。本当にアッラーは公正な者を御好みになられる」⁴⁵。

ビン・ガンナムは、ウラマーは、ハラールやハラームに関して知識を有するだけではなく、新奇物(ビドア)に対してジハードする役割を担うのが正しい役割だと考えている。「[ウラマーは、]自分の可能性や能力に応じて、新奇物や偶像に対してジハードを起こす。手で、舌で。心でのジハードは最も弱い段階である」(bin Ghannām 1985, 49)。ただし、この説明では、戦いのジハードは含まれていない。

以上を考察すると、〈シャイフ〉のジハード観は、実に複雑であることが浮かび上がってくる。まず、〈シャイフ〉は、イスラーム中道論の主張した通りに、中道派ジハード観(b)～(d)の全ての要素について知悉し、書き残していると言えよう。だが、〈シャイフ〉のジハード観は、そのみに留まらないのである。「中道のジハード観」よりも、ジハードの対象を相当に広く拡張している。つまり、〈シャイフ〉が宗教指導するワッハーブ主義・サウード朝は、タウヒードの宣教を目的としていたとはいえ、ムスリムを自称する信者と戦い、戦場では奇襲や待ち伏せを行っていた。〈シャイフ〉は、タウヒードからの逸脱を正しいイスラ

ムの道に回帰させるために、ウラマーは戦闘以外のジハードに従事するべきであると説いていた。

すると、〈シャイフ〉は、自分がイスラームのジハードの規定に反するとどうして考えなかったのだろうか。言い換えると、〈シャイフ〉のジハード観は、「中道のジハード観」の(a)ムスリムに対してジハードはしない、という基準に違反していたのではないのか。そして実は〈シャイフ〉は、ムスリムに対して先制攻撃で戦争を仕掛ける過激な思考を持っていたのか。以下では、「〈シャイフ〉はムスリムに対してジハードをしたのか」という論点に絞り込んで、さら検討してみよう。

本稿は既に、〈シャイフ〉は、宗教的な論争相手が自分に対して先制攻撃を仕掛けてきたと考えていたことを確認した。また〈シャイフ〉は、一度、自分たちの宣教を受け入れた者たちが、それを裏切ったと考えていたとも確認した。さらに、信仰告白とジハードをめぐる論争に関する〈シャイフ〉の見解については、以下の記述から理解できる。〈シャイフ〉は、書いている。

イスラームの五柱の中で最も重要なのは、二つの信仰告白⁴⁶である。他の四つの柱は、放置されたとしても重要ではない。そこで、彼らが我々に戦いを挑むとしても、四つの柱が放棄されたとして、不信仰とは裁定されない〔と考える〕。ウラマーの間には、それら四つの柱の放棄について不信仰と裁定するか見解の相違があるが、我々は、ウラマー全員が同意できること、つまり、二つの信仰告白について以外には戦わない。⁴⁷

〈シャイフ〉にとって、タウヒード・ウルーヒーヤは至上の価値であり、ジハードはタウヒード・ウルーヒーヤのみのために戦われるものである。タウヒード・ウルーヒーヤへの「信仰告白をしない」人間は、タウヒードを外見（行為）と内面（思考）の両面で満たしてはならない。したがって、もしも〈シャイフ〉が現代イスラーム理論の用語を知っていれば、おそらく、〈シャイフ〉の戦った相手について、「ムスリムの最低基準であるタウヒード・ウルーヒーヤへの信仰告白をしていない」と述べたことだろう。そして、〈シャイフ〉のジハード観は、「中

道のジハード観」の枠組に収まっている、と述べたことだろう。

イスラーム教では、背教 (irtidād, ridda) は、イスラーム信仰を捨てたり、アッラー以外の神を信仰したり、預言者を中傷するなどの行為に対する罪であり、ムスリムに対して適用される重罪である。悔悛の猶予は与えられるが、それを拒むと死刑とされる(中田 2002b)⁴⁸。背教するムスリムを背教者(murtadd)というが、背教は不信仰よりも罪が重い (Ibn ‘Uthaymīn, n.d.)。不信仰と背教は、どちらもイスラーム教の教義に反する状態を指し、悔悛が期待されているが、不信仰は背教よりも多くの項目を含んでいる。また不信仰は、本項で『中道派事典』や〈シャイフ〉の解釈を解説してきたように、それ自体が即、死刑を宣告される対象ではないとされている。

本稿の2.2では、Helmsが定義や引用を付けずにカーフィル・ムルタッドという概念について言及し、「最も厳しい制裁に責任を負うもの」と書いていると指摘しておいた。実のところ、〈シャイフ〉は、「背教的な不信仰（カーフィル・ムルタッド, kāfir murtadd）」について以下のように書いている。〈シャイフ〉によると、背教的な不信仰者は、イスラーム法を罵る者、アザーン（礼拝の呼びかけ声）を聞いたときにそれを罵る者、アッラーの統治に対して偶像を押しつけてくる者、女性が相続することを罵る者、重罪である父や母の殺害を非難しない人間である。ただし、それらの全てを犯したムスリムでも、信仰告白《アッラーの他に神無し》を唱えたと、不信仰から保護されているのだと言う⁴⁹。つまり、ここで確認できるのは、〈シャイフ〉は、あるムスリムが「背教的な不信仰」に該当するか否かの裁定に際して、信仰告白を唱えるムスリムには適用しないという基準を設定している点である。従って、Helmsの指摘は不正確であり、〈シャイフ〉は中道的タクフィール観と同じように「緩やかな」基準で「背教的な不信仰」を適用していると言える。

5. 結論

本稿は、ワッハーブ主義を過激と見做す欧米の研究と、〈シャイフ〉はイスラーム中道派に属すると見做すアラブ世界の研究のどちらも、〈シャイフ〉の著作を十分に検証していないという問題点を確認した。そこで、〈シャイフ〉のタク

フィール観とジハード観について、ビン・ガンナームの著作に収集されている書簡集と小論集を解説し、中道派イスラーム研究の成果を評価基準として検証した。

その結果、〈シャイフ〉のタクフィールに関する考えは、タクフィールの裁定を証拠に基づいて慎重に見極めようとする「中道派タクフィール観」を共有していたと評価できる。ただし、あらゆる先行研究が指摘していなかったが、〈シャイフ〉は、タクフィールをしていたのは〈シャイフ〉ではなくて、〈シャイフ〉が宣教の対象としていた「誤った信仰をしている者たち」の側であると認識していた。そして〈シャイフ〉は、自分は正しいタウヒードを宣教しているにもかかわらず、宣教上の敵は、明白な根拠もなく憶測に基づいて〈シャイフ〉を不信仰だと中傷していると考えていた。

また、〈シャイフ〉のジハード観は、実に複雑なものであると浮き彫りになってきた。確かに、〈シャイフ〉は、中道派イスラーム研究の主張した通りに、中道派ジハード観の(b)～(d)の要素を備えており、「ジハードには慎重に出動するように」という考えに立脚していると言えよう。

だが一見すると、〈シャイフ〉のジハード観は、(a)ムスリムに対する戦いはジハードの対象ではない、に反しているように見られてきた。つまり、〈シャイフ〉が宗教指導するワッハーブ主義・サウード朝は、タウヒードの宣教を目的としていたとしても、ムスリムを自称する信者と戦い、戦場では奇襲や待ち伏せを行っていた。確かに〈シャイフ〉のジハード観は、「中道のジハード観」よりも、ジハードの対象を広く拡張していた。

本稿が検討した成果によると、〈シャイフ〉が、自分がイスラームのジハードの規定に反すると考えなかった理由は、三点を確認した。一つ目は、〈シャイフ〉は、彼が宣教しようとしていた相手が自分たちに先に攻撃を仕掛けてきたと考えていたからである。二つ目に、クルアーンの句、「信仰を誓約した後にそれを破る」者には「戦え」であろう。三つ目に、〈シャイフ〉は、タウヒード・ウルーヒーヤを信仰告白しない者は、ジハードの対象とできると考えていたからである。これらの理由のために〈シャイフ〉は、彼の戦いは正当であると考えていた。そこで、おそらく〈シャイフ〉は、中道派ジハード観の(a)「ムスリムに対する戦いはジハードの対象ではない」に違反していないと考えていたと推測できる。

欧米の研究者にとって、〈シャイフ〉が過激なタクフィール観を持たず、先制攻撃も認めていなかったのは、盲点となっていた。また、タンターウィーのようなアラブの研究者にとっては、〈シャイフ〉の宗教的な論争相手が先制攻撃の主体であり、しかも「ムスリムの基準を満たしていなかった」のは盲点となってきたと言えよう。〈シャイフ〉のタクフィール観とジハード観は、イスラーム中道派による基準を、一つを除いて明らかに満たしていた。最も判定の難しい「ムスリムに対する戦いはジハードの対象ではない」という中道のジハードの基準については、〈シャイフ〉はイスラーム学を根拠として、違反していないと考えていたと言えよう。

注

- 1 イブン・タイミーヤに関する概説には以下がある。（中田 2002a）
- 2 Al-Risāla 19, min Muḥammad bin ‘Abd al-Wahhāb Ilā Aḥmad bin Ibrāhīm, muṭawwī’ Murāt (bin Ghannām 1985, 340).
- 3 Routledge から 2015 年に、Routledge library editions, Saudi Arabia; v. 2 として再販されている。
- 4 イフワーン運動は、1912～30 年頃にアラビア半島の遊牧民がワッハーブ主義を受容し、サウード朝の拡張のための征服運動となったと知られている。（中村 2002）
- 5 Helms は、ジハードは、ムルタッド（背教者）に対するジハード、ブガード（反乱者）に対するジハード、ムハーリブーン（分派主義者）に対するジハードに三分類できると述べた（Helms 1981, 98-99）。この分類が、ワッハーブ主義の学者による分類なのかは説明されていない。
- 6 ピン・ビシュルの年代記は、以下の著者名と書名で知られている。‘Uthmān bin ‘Abd Allāh bin Bishr. *Unwān al-Majid fī Ta’ārikh al-Najd*. である。タンターウィーがどの版を参照したのかは不明である。
- 7 ピン・ビシュルへの言及が見られる（al-Taṭṭāwī 1961, 21, 38, 41）。
- 8（医王 2002）を参照。
- 9 ワッハーブ主義・サウード朝の戦闘が、攻撃、奇襲、待ち伏せ攻撃、農地や家屋の破壊などを戦術としていた戦史は、ピン・ガンナームの著作でも確認できる（bin Ghannām

1985, 95-203)。

10 戦いに関する年代記に関しては、ヒジュラ暦 1159 年 (AD.1746 年) から 1212 年 (AD.1797 年) までを記している。

11 Al-Mas'alat 4 (bin Ghannām 1985, 409).

12 Al-Risāla 3, min Muḥammad bin 'Abd al-Wahhāb Ilā muṭāwa'at ahl Sudayr wa al-Washm wa al-Qaṣīm (bin Ghannām 1985, 244).

13 Al-Risāla 7, min Muḥammad bin 'Abd al-Wahhāb Ilā 'Abd Allāh bin Suḥaym (bin Ghannām 1985, 276).

14 Al-Risāla 7, min Muḥammad bin 'Abd al-Wahhāb Ilā 'Abd Allāh bin Suḥaym (bin Ghannām 1985, 277).

15 Al-Mas'alat 13 (bin Ghannām 1985, 441).

16 *Ibid.*

17 *Ibid.*

18 *Ibid.*

19 Al-Mas'alat 1 (bin Ghannām 1985, 398-9).

20 Al-Mas'alat 13 (bin Ghannām 1985, 442).

21 Al-Mas'alat 12 (bin Ghannām 1985, 439).

22 Al-Mas'alat 1 (bin Ghannām 1985, 397).

23 Al-Mas'alat 12 (bin Ghannām 1985, 438).

24 Al-Mas'alat 15 (bin Ghannām 1985, 446).

25 Al-Mas'alat 12 (bin Ghannām 1985, 439).

26 Al-Risāla 6, min Muḥammad bin 'Abd al-Wahhāb Ilā Muḥammad bin 'Īd, muṭāwa'at Tharmidā' (bin Ghannām 1985, 263).

27 Al-Mas'alat 12 (bin Ghannām 1985, 439).

28 Al-Risāla 6, min Muḥammad bin 'Abd al-Wahhāb Ilā Muḥammad bin 'Īd, muṭāwa'at Tharmidā' (bin Ghannām 1985, 264, 266).

29 Al-Mas'alat 7 (bin Ghannām 1985, 423).

30 Al-Mas'alat 7 (bin Ghannām 1985, 424).

31 Al-Mas'alat 7 (bin Ghannām 1985, 426).

- 32 Al-Mas'alat 10 (bin Ghannām 1985, 434).
- 33 Al-Mas'alat 7 (bin Ghannām 1985, 430); Al-Mas'alat 10 (bin Ghannām 1985, 435);
Al-Mas'alat 14 (bin Ghannām 1985, 443, 445).
- 34 Al-Risāla 2, min Muḥammad bin 'Abd al-Wahhāb Ilā 'Āmmat al-Muslimin (bin Ghannām 1985, 238).
- 35 Al-Risāla 2, min Muḥammad bin 'Abd al-Wahhāb Ilā 'Āmmat al-Muslimin (bin Ghannām 1985, 239).
- 36 Al-Risāla 6, min Muḥammad bin 'Abd al-Wahhāb Ilā Muḥammad bin 'Īd, muṭāwa'at Tharmidā' (bin Ghannām 1985, 265).
- 37 Al-Risāla 7, min Muḥammad bin 'Abd al-Wahhāb Ilā 'Abd Allāh bin Suḥaym (bin Ghannām 1985, 274).
- 38 Al-Risāla 2, min Muḥammad bin 'Abd al-Wahhāb Ilā 'Āmmat al-Muslimin (bin Ghannām 1985, 244).
- 39 Al-Risāla 5, min Muḥammad bin 'Abd al-Wahhāb Ilā Muḥammad bin 'Abbād (bin Ghannām 1985, 261).
- 40 Al-Risāla 4, min Muḥammad bin 'Abd al-Wahhāb Ilā 'Abd Allāh bin Suḥaym, muṭāwa'at al-Majma'a (bin Ghannām 1985, 255).
- 41 Al-Mas'alat 3 (bin Ghannām 1985, 405).
- 42 Al-Mas'alat 3 (bin Ghannām 1985, 405-6).
- 43 Al-Mas'alat 3 (bin Ghannām 1985, 406).
- 44 Al-Mas'alat 3 (bin Ghannām 1985, 406).
- 45 Al-Risāla 6, min Muḥammad bin 'Abd al-Wahhāb Ilā Muḥammad bin 'Īd, muṭāwa'at Tharmidā' (bin Ghannām 1985, 266).
- 46 いわゆる「信仰告白 (shahāda)」は、正確には、アッラーと預言者に対する二つの信
仰告白 (shahādatayni) である。
- 47 Al-Mas'alat 3 (bin Ghannām 1985, 405).
- 48 (小杉 2002a) は、棄教と呼んでいる。
- 49 Al-Risāla 6, min Muḥammad bin 'Abd al-Wahhāb Ilā Muḥammad bin 'Īd, muṭāwa'at Tharmidā' (bin Ghannām 1985, 265).

文献

日本語

- 医王秀行 (2002) 「リッダ」 大塚和夫他『岩波 イスラーム辞典』岩波書店・1049.
- 小杉泰 (2002a) 「棄教」 大塚和夫他『岩波 イスラーム辞典』岩波書店・301.
- 小杉泰 (2002b) 「ムスリム」 大塚和夫他『岩波 イスラーム辞典』岩波書店・969-970.
- 中田考 (2002a) 「イブン・タイミーヤ」 大塚和夫他『岩波 イスラーム辞典』岩波書店・160.
- 中田考 (2002b) 「背教」 嶋田襄平他『新イスラム事典』平凡社・385.
- 中村覚 (2002) 「イフワーン運動」 大塚和夫他『岩波 イスラーム辞典』岩波書店・153-154.

アラビア語

- Āl al-Shaykh, ‘Abd al-‘Azīz bin ‘Abd Allāh bin Muḥammad (al-Mushrif al-‘Āmm) (2015) *Mawsū‘at al-Waṣāṭiyya*. Khams al-Mujalladāt. Riyāḍ: Jāmi‘at al-Malik Su‘ūd.
- al-Taṭāwī, ‘Alī (1961) *Muḥammad bin ‘Abd al-Wahhāb*. Dimashq: Dār al-Fikr.
- bin Bishr, al-Shaikh ‘Uthmān bin ‘Abd Allāh (1982) *Unwān al-Majīd fī Ta’rīkh al-Najd*. al-Riyāḍ: Dārat al-Malik ‘Abd al-‘Azīz.
- bin Ghannām, al-Imām Ḥusayn (1985) *Ta’rīkh Najd*. Al-Qāhira: Dār al-Shurūq.
- Ibn ‘Uthaymīn (n.d.) Hal al-Murtadd Ḥukm al-Kāfir al-Murtadd? Fatāwā min nūr ‘alā al-Darb. *‘Allimnī*. <https://fatawapedia.com/33387-هل-المرتد-حكمه-حكم-الكافر-الأصلي> (2023年1月9日閲覧).
- al-Yāsīnī, Ayman (1987) *al-Dīn wa al-Dawla fī al-Su‘ūdiyya*. London: Dār al-Sāqī.

欧米諸語

- Al-Yassini, Ayman (1985) *Religion and State in the Kingdom of Saudi Arabia*. Boulder, Colo.: Westview Press.
- Firro, Tarik K. (2013) The Political Context of Early Wahhabi Discourse of Takfir. *Middle Eastern Studies* 49. 770-789.
- Helms, Christine Moss (1981) *The Cohesion of Saudi Arabia: Evolution of Political*

Identity. London: Croom Helm.

Laoust, Henri (1939) Ibn Taimīya et la théocratie wahhābite. In Esther Peskes ed. (2016) *Doctrine: Wahhabism and the Exclusive Muslim Community*. Critical surveys in Islamic Denominations Series 1: Wahhabism: Doctrine and Development. Gerlach Press. 80-103 (original: In Henri Laoust (1939) *Essai sur les doctrines sociales et politiques de Taḳī-d-Dīn Aḥmad b. Taimīya, canoniste ḥanbalite né à Harrān en 661/1262, mort à Damas en 728/1328*. Cairo: Imprimerie de l'Institut Français d'Archéologie Orientale, 506-540).

Satoru Nakamura (2019) The Tenets of Jihād and Takfīr in the Emerging Concept of Wasaṭīya (Moderation) as Counterterrorism in Saudi Arabia. *Asian Journal of Middle Eastern and Islamic Studies* 13-3. 310-330.

Vassiliev, Alexei (2000) *The History of Saudi Arabia*. London: Saqi.

Voll, John (1975) Muḥammad Ḥayyā Al-Sindī and Muḥammad ibn 'Abd Al-Wahhāb: an Analysis of an Intellectual Group in Eighteenth-Century Madīna. *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, 38-1. 32-39.

The perceptions of Muhammad bin ‘Abd al-Wahhāb on takfīr and jihād

Satoru NAKAMURA

This paper examines the Wahhabi perception of religious politics. Previous studies on Wahhabism in the West regarded it as a radical imitation of ibn Taymīya, but they did not examine the original texts authored by bin ‘Abd al-Wahhāb. Although modern Islamic studies in the Arab world evaluate Wahhabism as an “Islamic Moderation (Middle Way),” they also fail to analyze his real perceptions written in the original texts. Therefore, this paper aims to clarify bin ‘Abd al-Wahhāb’s perceptions on takfīr and jihād by examining his epistles and treatises collected in Ḥusayn bin Ghannām’s *History of Najd*.

After examination, it was confirmed that bin ‘Abd al-Wahhāb’s perception of takfīr shared all the moderate and cautious elements of “Islamic Moderation.” In addition, it was confirmed that bin ‘Abd al-Wahhāb recognized that it was not he, but his religious opponents, who violated the tenets of tawhīd and began labeling him a disbeliever (kufr) based on conjectures about him without correct knowledge of the Qurān, ḥadīth and tawhīd.

Bin ‘Abd al-Wahhāb’s perception of jihād was complex. He cited Qurānic verses and confirmed that jihād must be mobilized with caution. His perception of jihād also shared elements of “Islamic Moderation” or defensive jihād. Then what was bin ‘Abd al-Wahhāb’s true reason for fighting battles against Muslims, which is prohibited in Islam? He recognized that it was his religious opponents who made the first violent strike against him. He also regarded his religious opponents as betrayers who failed to confess tawhīd al-ulūhiya, which made them deserving targets of jihād.

Keywords : Islam, Saudi Arabia, Wahhabism, takfir, jihad

キーワード：イスラーム、サウディアラビア、ワッハーブ主義、タクフィール、ジハード